✻ KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY ✻
INSTITUTE FOR THE RESEARCH OF DISASTER AREAS RECONSTRUCTION

関西学院大学災害復興制度研究所ニュースレター

FUKKOU

Vol.10

▶◀contents▶◀
目 次

○巻頭言
復興と想像力
関　嘉寛…… 1
○報告　新潟県中越地震から５年
921 地震 10 周年の台湾にて思うこと
稲垣文彦…… 2
自立して持続する地域を目指して
上村靖司…… 3
○東京国際シンポジウム開催報告
山地 久美子 …… 4.5
○観感学楽―被災地ネット
ペーパードームが繋ぐ日・台被災地交流
―神戸・台湾・新潟・台湾南部水害被災地
……「袋子的願望」（袋の願い）／垂水英司
トルコマルマラ地震 10 年の土を踏んで／
石川永子…… 6
○研究所５年フォーラム開催案内 … 7
○事務局だより
2010 年度から２期に（山中茂樹）
日本災害復興学会　会員募集中！
編集後記…… 8

復興と想像力

関西学院大学社会学部准教授
関　嘉寛

今年８月の台風９号による水害は、兵庫県佐用町に大きな被害をもたらした。亡くなられた人 18 名、行方不明者２名、全壊・大規模半壊・半壊・床上浸水が計 1,038 棟にのぼる。この災害でも今までの自然災害同様、多くのボランティアが被災地に駆けつけ、作業を行った（９月 25 日現在、のべ 16,477 人・町発表）。

私も短い時間ではあったが、行かせてもらった。水害の被災地にはじめて行き思ったことは、水害における復興もまた想像力を必要とするということだ。

2006 年以来私がよく訪れる新潟県中越地震のある被災集落は、地震後、全住民に避難勧告が出された。約３年間の避難所・仮設住宅などでの生活の後、もとの集落に戻った戸数は、地震前の半数以下になってしまった。

地震後、集落に戻った人びとは、今まで経験したことの無かったことに直面する。一つは、個人ではなく集落として考え行動する必要が生じたことである。この地域でも稲作はおこなわれているが、稲作は個人主義的な活動といわれる。「農家というのは、こっちの家がやったら俺の家はもっとという気になるものだ」とこの地域の人はいう。それが、「集落の復興はどうする？」というのだから彼らはいままでとは異なる想像力を働かせねばならなくなる。

もう一つの新しい経験は、ボランティアや NPO・NGO の人が来るようになったことである。彼らは商売のために来る人や行政サービスを行うために来る人とは異なり、いわばこの地域の人々とこの集落が好きでやってくる。そのような人たちとどのように接したらいいのか、彼らにとっては当惑させられる瞬間であろう。「ありがたいけど、なんでこんなところに来るんだろう」というのはこの地域の人たちの率直な感想であった。

そんなボランティアや NPO・NGO という外部から関わる人たちもまた想像力を働かせる必要がある。自分たちが思っている「被災者像」や「復興像」をもって、集落の人たちと接すると肩すかしを食らう。それもそのはずだ。集落の人たちもまた想像力を働かせて、自分たちの新しい姿を探っているところなのだから。もちろん、集落の人たちがこの地域への愛着を持っていることはいうまでもない。それゆえ、外部から関わる人たちは集落の人たちが感じている新しい社会（関係）構築の困難さと同時にこの地に住む覚悟に想像力を働かせる必要がある。

このように考えると、復興に必要とされる想像力とは熟慮と構想力からなっているのだろう。集落の人びとと外部から関わる人たちがお互いにこの想像力を働かせることによって、復興が進んでいくのではないかと思う。このような想像力の協奏が、創造へと繋がるのではないか。５年がたった中越地域でもいろいろな協奏がおこなわれている。

発災から３カ月ほどたち水害の被災地でもいままでの経験を生かし、さまざまな NPO・NGO やボランティアが活動している。これらの活動は、まさに復興における想像力の協奏の第一歩なのであろう。

KWANSEI GAKUIN

新潟県中越地震から5年

報告

921地震10周年の台湾にて思うこと

稲 垣 文 彦
社団法人中越防災安全推進機構復興デザインセンター副センター長

新潟県中越地震から５年を機に、柄にもなく、日本災害復興学会に震災からこれまでの復興プロセスを振り返る論文を投稿させていただいた。あらためて震災からの復興プロセスを振り返ることで、「中越地震からの復興は、過去の被災地に支えられていたこと」を再認識することが出来た。まずは、そもそも、中越復興市民会議が立ち上がったこと。住民主体の復興がいかに大切か、そのためには、様々な主体をつなぐ中間支援組織が必要なことを教えてくれたのは阪神・淡路大震災の関係者であった。そして、現場で模索する中で、おぼろげながら感じていた「住民主体の復興」、「外部支援者の関与の重要性」、そして、「地域資源を生かした地域の活性化」といった中山間地の復興に対する認識に「それでいいんだ」と背中を押してくれたのは台湾 921 地震の関係者であった。

復興とは模索することではないかと思うときがある。震災から１年目、３年目、５年目、その節目の時々に、いや、日々思っている。その時々で、違った課題が生まれ、その課題に対し、明解な解決策は見出せないまでも、日々、現場で模索をしながら課題解決に向けた道を探している。中越地震から５年、今、模索をしている課題は、「持続可能性」についてである。５年間の復興プロセスで明らかに住民主体の地域復興の取組みは活発化してきており、そして、その裾野も広がっている。しかし、いまだ、過疎・高齢化という課題に対しての明解な解決策が見出されたわけではない。また、今の地域復興の取組みは、中越地震からの復興に対する特別な枠組みによって支えられている（例えば、㈶新潟県中越大震災復興基金という特別な資金によって活動が支えられている）。過疎・高齢化に対しての解決策は、10 年やそこらでは見出すことはできないだろう。中越では、今、この特別な枠組みがなくなった後の持続可能性が大きな課題となっている。

台湾 921 地震 10 周年の記念シンポジウムにご招待いただいた。思わぬかたちで、台湾 921 地震から 10 年目の復興の取組みを拝見させていただいた。思えば、2005 年 12 月に初めて台湾 921 地震からの復興の現地視察に行き、そこで、上述した感覚を持つことができた。そして、今回も、今の課題に対する明解な解決策を見出せたわけではないが、我々がおぼろげながら感じている気付きに対して、台湾の皆様が後押しをしてくれた。それは、いつまでも「誇りを持てる地域」であり続けることの大切さであり、そのための「外に開き続ける地域づくり」、「多様なものを認めあい、つながりあう地域づくり」の重要性である。勿論、持続可能性には、経済的な後ろ盾がなければならない。台湾に行くまで、その経済的な面ばかりに目を奪われ悩んでいた。しかし、今回、台湾の取組みを目にすることで、経済的な仕組みを下支えする「地域の誇り」が何よりも大切なことを感じることが出来た。

台湾では、大勢の方々とお会いすることができた。台湾の 921 地震の復興にかかわっている方々、中国の汶川地震の復興にかかわっている方々、そして、日本の各地（神戸、能登など）の復興にかかわっている方々に。さながら、様々な現場で、それぞれにお会いしている皆が一堂に集まった同窓会のようであった。そして、皆様と楽しく交流をさせていただいた。そこで思ったことは、やはり、中越地震からの復興は、過去の被災地、そして、様々な方々に支えられているということである。皆様が、持続可能性という課題について、中越の中だけで悩んでいた我々に一筋の光をもたらしてくれた。そして、何よりも、支え続けてくれている大勢の皆様、いや、多様な仲間とのつながりを感じた台湾 921 地震 10 周年であった。

▲ 921 地震 10 周年イベントの様子（桃米村、ペーパードームの前にて）

報告

自立して持続する地域を目指して

上村靖司
長岡技術科学大学准教授

風化

ひさしぶりに山古志へ行った。何カ月ぶりだろう。１カ月ほど前に行くには行ったがまさに行っただけ。今回はぐるっと一回りしてみた。目に見える復旧が終わって丸２年だから、風景に特段の変化はない。ただ、撤去しないことになった木籠の水没集落の家々が目に見えて傷んできているのだけはわかる。

確実に風化が進んでいる。それは見た目のことでなく、私自身の心の中のことを言っている。あの頃の心臓をわしづかみにされるような押しつぶされそうな痛みや、何かに取り憑かれたかのように突き動かされる大きな心の力は、確実に弱まっている。災害から時間が経つにつれて自分の中での仕事の優先順位の付け方が確実に変わってきている。

「風化させてはいけない」。どこの被災地にいっても、何年たっても必ず聞く言葉。言いたいことはわかるし、否定するつもりもない。しかし、自然の時間の刻みのなかで、風化はするものだし、止めようのないものだ。精一杯、人間が風化させないようにしたところで、コンクリートで固めるか、文字や映像の記録を残す以外にはない。人の心の中の様々な想いまでも風化をさせずにおくことのできるコンクリートはあるのだろうか。

芽吹

「現場が大切」といっていた自分自身が、現場から遠ざかっているという現実がある。しかし、震災１年後ぐらいから大勢の仲間達と一緒に蒔きつづけてきた「復興の種」が、各所で力強く芽吹いてきているという実感はある。賛同してくれた地域の人々と支援者らが、粘り強く水と肥料を与え続けてくれたおかげだ。これから順調に伸びていって、きれいな花を咲かせ、そして次につながる種を実らせることができるのか。雪解けから顔を出したばかりの柔らかい新芽が、折れたり枯れたりしてしまわないか、今はそのことの方が心配だ。これからは、雨、風に晒されながら、自分の力で伸びていかなければならない。まさに「生き抜くチカラ」が試されることになる。

愛

中越地震被災地は今、「愛」に満ちあふれている。とはいっても今年１月からのNHK大河ドラマの主役に大抜擢された直江兼続の「愛」である。殺伐とした戦乱の世にありながら、兜の前立に「愛」の文字をあしらい、愛と義に生きた智将とされる人物だ。その縁の地が中越各地に散在していることから、どこに行っても「愛」の文字が目に入ってくる。

「愛」をあしらったグッズを見るたびに、震災からの復興を単なる愛の議論で終わらせてはいけないと思う。地域が、人々が、これから自立して厳しい競争の中で生き延びていかなければならないからだ。どんな些細なことでも、チャンスと見れば、商魂たくましく売っていかなくてはならない。「愛」効果の賞味期限が切れるのも、そう遠いことではない。

棚卸し

「災害は社会の歪みを可視化する」とか「災害は社会のトレンドを加速する」と言われる。復興は「顕在化した課題に真正面から向き合うことだ」という人もいる。すべて真実だと思う。しかしそれならば、災害があったことはあくまできっかけであって、地域の本質的課題に向き合うことの方が本質だ。そうなれば、それはもはや災害とか復興とか、そういった言葉はふさわしくない。

震災から５年。復興前半戦の評価が始まった。一回棚卸しをして、賞味期限切れの商品は廃棄し、残った売れそうなものは、もっとよく売れるようにきれいに並べ直して、足りなくなった商品は補充しなくてはならない。季節の変化、トレンドの変化を敏感に察知して、新しいコーナーも作らなくてはいけない。もちろんそれに合わせてチラシも配らなくはならない。評価のための評価であっては決していけない。上手に棚卸しをして、後半戦に、そして未来につながる評価をしなくてはならない。

おわりに

「風化させてはいけない」ではなく、「上手に風化させなくてはいけない」が真実だと思う。もちろん忘れてはいけないこと、時々は思い出さなくてはいけないこと、これは風化しないように大切に保管しなくてはいけない。しかし、震災をきっかけに気づいたこと、思い出したこと、動き出したこと、それらはこれからの未来のためにもっともっと大事にしていかなくてはならないと思う。

震災４年目の頃、「復興、復興といつまで言ってるんだ。そんなことを言っているうちはダメだ」と山古志の人からピシャリと言われた。その通りだと思う。被災を過剰にひきずり、被害の大きさを言い訳にし、復興という（少し色あせてきた）錦の御旗をいつまでも掲げている、そんな場合ではない。変化してしまった現状を肯定し、変化に適応し続けていく柔軟さを、当たり前のこととして身につけて行かなくてはならない。

「人間復興」へ向けた国際連携の新たな取組み

◆東京国際シンポジウム
災害復興と国際連携～国境超えるパートナーシップをめざして 開催報告

山 地 久 美 子
関西学院大学災害復興制度研究所准教授

関西学院大学災害復興制度研究所は開設から５年の節目を迎え、新たなステージに移っています。それは「人間復興学」の展開を国内から国際的な研究・ネットワーク活動へと拡大することです。今後は世界各地の被災地の現場知と学問知を集結すべく、学問的研究ネットワークと交流の拡大を図ります。総合政策研究科はグナ・セルバドュレイ教授（カリフォルニア州立大学サンノゼ校）をCOE 客員教授としてお迎えし、着実にネットワークが構築されています。

東京国際シンポジウムは、10 月 19 日（月）に関西学院大学丸の内キャンパスがあるサピアタワー５階、サピアホールで開催されました。80 名を超える参加者の中、浅野考平副学長の開催挨拶、大森雅夫内閣府政策統括官（防災担当）の来賓挨拶、そして、山中茂樹主任研究員のシンポジウム趣旨説明から始まりました。

シンポジウムは基調講演とパネルディスカッションの２部構成からなり３時間にわたって「人間復興」に向けた国際的な連携・協力のあり方や方向性について熱心な議論が交わされました。シンポジウムの様子を、簡単に紹介させていただきます。

●基調講演「災害復興と国際連携」

基調講演の内閣府参事官（災害予防担当）田尻直人氏からは、日本政府の立場から国際連携や支援のあり方と今後の方向性が示されました。国内においては 1995 年に起きた阪神・淡路大震災の復興で得られた教訓が日本の防災・災害復興のあり方へ大きく影響していることが挙げられ、災害に強いまちづくりと被災者生活再建支援の重要性が指摘されました。世界各地で発生する大規模災害への防災協力や支援での実績、国連防災会議（2005 年、日本・兵庫県）で採択された「兵庫行動枠組」にみる日本の果たす役割、国際復興支援プラットフォームの持つ資源、経験を共有することの重要性が強調されました。

●パネルディスカッション（報告・コメント）

海外の被災地にて支援経験のある各氏からの報告の後、それぞれの専門・立場から活発な意見が出されました。

顧林生所長（清華大学都市計画設計研究院公共安全研究所）からは 2008 年の四川大地震において中国が世界から多くの知恵、資源、物資を受けたことが紹介され、続いて被災地の復興状況について復興計画の概要や課題として住宅と学校の再建の重要性や産業の発展の必要性について具体的な動きとともに述べられました。さらに、中国の防災と危機管理について触れるとともに、国連等の国際的組織と国家間の連携の必要性が挙げられ、日本と中国の連携においては予防・応急・復興、そして減災における制度設計、仕組みづくりへの協力への期待が述べられました。顧所長は、日本の災害復興における経験の蓄積そのものが重要な資源であり、東アジア（日本・中国・韓国）がともに災害での経験を蓄積し、世界で共有できる「地球財」としていくことが提案されました。

陳亮全教授（台湾大学建築與城鄉研究所）からは、1999 年に起きた集集大地震における復興の状況が報告され、被災地の小都市・中山間地として特有の高齢化現象や二次災害への懸念が今後の復興課題として挙げられました。国際連携においては、災害時に日本や世界各国から受けた救援隊や様々な物資支援、ボランティアの様子が語られました。ここで陳教授が強調されたのは、平時におけるネットワークづくりの重要性でした。台湾と日本との交流は集集大地震が起こる以前、阪神・淡路大震災直後に始まっていて、室﨑益輝所長をはじめとする多くの研究者や被災者との交流が深まる中で日本の「まちづくり」概念の重要性を認識し、「復興まちづくり」・「住民参加のまちづくり」が台湾の復興において柱の一つとなるまでに至ったことが紹介されました。交流とは市民をはじめとする多面的・多層的な交流が重要で、平時から情報交換のプラットホームづくりをし、緊急時にはお互いを支援しあい、復興時には長期的な観点からお互いの現場に足を運び、情報交換、ノウハウ技術を伝授することが

重要であると指摘されました。実際に活動する市民同士の交流は神戸の経験が台湾の復興につながり、台湾の経験が新潟・中越の復興へつながっていったのです。

地震とは異なる災害、ハリケーン・カトリーナ（以下、H・K）（2005 年）によって壊滅的な被害を受けたニュー・オルリンズ（以下、NO）はローリー・ジョンソン代表（ニューオルリンズ復興総合計画 UNOP 担当者／ローリー・ジョンソンコンサルタント代表）より被害と復興状況の報告がなされました。ジョンソン代表は、H・K の被害が起こる以前から神戸のプロジェクトグループの参画メンバーとして神戸の被災地をめぐり、復興まちづくりから様々なことを学んでいたことが、NO の復興過程で神戸の復興の経験を取り入れる契機となり、大きく役立ったことが強調されました。国際連携・協力においては、研究のネットワークのみならず、国際交流基金の助成を受け、NO と神戸のジャズを含む文化交流を行っている様子も紹介されました。その一方で国際的連携や協力を支援する枠組みや資金（公的・民間共に）の不足、復興事業における市民の参加の欠如が指摘されました。

3 氏の報告にたいするグナ・セルバドュレイ（関西学院大学大学院総合政策研究科 COE 客員教授・カリフォルニア州立大学サンノゼ校教授）からのコメントは次のとおりです。

災害からの復興は、経済の復興・復旧やまちの物理的な復興だけではなく「人間がどのように復興から立ち上がるのか」という側面が重要であると確認されました。さらに、「HOUSE と HOME は違う —— HOME には社会的なネットワークがそこにある」と、ネットワークを維持した人間中心の復興のあり方が強調されました。各国の被災地の成功事例とともに失敗事例から学ぶ事の重要性、平時からネットワークを築くことの必要性、それも政治的な枠組みだけではなく、実際に行動を起こす人達でネットワークを結ぶことの大切さが示されました。国際連携・協力においては第三世界への復旧・復興支援が重要で、沢山の支援があるものの、それらが必ずしも現地の人のニーズに沿っていないことが指摘され、相手を尊重していく視点が欠如していることが問題であると述べられました。日本のトップ—ダウン式の国際協力は依存モデルをつくりあげてしまっており、今後は「自主・自立」を重んじた支援や協力が必要だと改めて指摘されました。

●パネルディスカッション（ディスカッション）

コーディネーターの室﨑益輝所長は、これまでの話から次の 5 つの点をまとめています。

1.「人間の復興を基本とする」
2.「失敗の経験を伝える」
3.「実行、実践可能な多様なネットワークをつくる」
4.「相手の自主・自立を重んじた国際協力・国際連携が必要」
5.「復興を連続的なつながりの中で考える」

ディスカッションの中では多彩な議論がなされましたが、印象的なのは国際協力への障害とは、偏見、不信感、相互の誤った認識にあるということです。知識を共有し行動、協力していくためには、新しいネットワークづくりを考えることが必要で、人材育成が重要となってきます。そこでは被災地の教訓をつなぐための教育や社会システム、そして大学など教育面における人材育成も求められています。国際連携・協力を進めるにはお互いの制度や文化の違いを理解する努力が必要であり、支援においては、被災地や被災者にたいするエンパワーメントが重要となります。さらに、大学研究者、実務家、市民など多面・多層的な参画による持続的な研究や人的ネットワークづくりを行うことが求められています。連携や協力においては信頼関係の確立が不可欠で日常的にコミュニケーションを図っていくことが大切であり、そのためには交流における多様性と持続性を維持することが重要で、長期的なサポートが求められます。今後はその活動を支える資金やシステムづくりを検討していくことが不可欠です。

室﨑所長からは、(1)台湾や中国では被災者の力を引き出すような支援体制があり、日本が学ぶべきことが沢山あること、(2)大学間･学生同士による海外の現地での交流の重要性、最後に、(3)空間的・心理的に集まれる場所の創設が提起された後、議論がつきない中でディスカッションは終わりを迎えました。

最後には、宮原浩二郎副所長の挨拶にて閉会となり、その後、場所を移して交流会が開催され、元内閣府特命担当大臣（防災担当）の沓掛哲男衆議院議員をはじめとした政府関係者、大学関係者、被災地の方々など 50 名近くの方が参集し、これからの災害復興と国際連携に向けた熱い議論が続きました。

関西学院大学、そして、災害復興制度研究所が国際的な活動を展開していく中で、多くの英知を集めた貴重な国際シンポジウムとなりました。関係者各位のご協力に深謝いたします。

観感学楽

かんかんがくがく

被災地を観る、
被災地の痛みを感じる、
そして、
被災地から学ぶ、
被災地の人たちと楽しむ。

被災地ネット

ペーパードームが繋ぐ日・台被災地交流
――神戸・台湾・新潟・台湾南部水害被災地……
「袋子的願望」（袋の願い）／垂水英司

トルコマルマラ地震 10 年の土を踏んで
／石川永子

ペーパードームが繋ぐ日・台被災地交流
――神戸・台湾・新潟・台湾南部水害被災地……「袋子的願望」（袋の願い）

垂　水　英　司
被災地市民交流会

始まりは阪神・淡路大震災 10 周年であった。その時、神戸で開催された国連防災世界会議に台湾は正式招待されなかった。じゃ、市民レベルで交流しようではないか。こうして私たちの日・台の被災地市民交流会は始まり、台湾の被災地から 20 数名の市民や活動者などを神戸に招いた。そして、野田北部のペーパードームで行った歓迎会で挨拶に立った廖嘉展（新故郷文教基金会董事長）さんが突然、「ペーパードームを是非台湾へ持って帰りたい」と発言したのに一同びっくり、しかしこれが始まりであった。

早速日本、台湾でそれぞれ実行委員会を立ち上げて取り組むことになった。その後 4 年近くの年月と紆余曲折の経過を踏まえ、昨年 9 月台湾の復興まちづくりで成果を挙げている桃米村に新しい姿で再生した。既に台湾全土から多くの人たちが訪れるポイントになり、音楽会、結婚式、ミサなど多彩な活動が行われている。

今年 9 月 21 日は 921 地震 10 周年、神戸からも多くの仲間たちが台湾へ向かった。ペーパードームでも様々な 10 周年記念事業が行われたが、その一つがインスタレーション「袋子的願望」オープン式である。「袋子的願望」これには少し説明がいる。5 年前神戸の交流会の最終日、廖さんのアイデアで日・台の参加者に「袋子的願望」と書いた紙袋が回された。そこに各自が願い事を書きながら募金を入れ、集まったお金を日・台市民交流の意思として新潟の被災地へ届けたのである。

台湾の 10 周年に当って「袋子的願望」の意義をさらに広げようと、台湾文化庁（文化建設委員会）の支援の下、造形作家陳冠君のインスタレーションをペーパードームの横に設置したのである。式典で今回は日本の被災地市民交流会からの義捐金を「袋子的願望」に入れ、廖嘉展さんに手渡した。そして廖さんから当日出席した黄碧端文化庁長官に手渡し、日・台被災地市民交流の意思として 8 月発生した台湾南部の水害被災地へ託した。

人と人、地域と地域の交流であればたやすく国境を越えられる。ペーパードームがこれからもそうした役割の一つを担っていくことを願いたい。

◀インスタレーション「袋子的願望」を前に、「袋子的願望」を手に持った参加者たち。台湾、日本それに中国大陸からの参加者が一堂に。（前列中央は台湾文化庁長官）

トルコマルマラ地震 10 年の土を踏んで

石　川　永　子
人と防災未来センター

アジアとヨーロッパの架け橋とも言われ、多様な文化が交差し人々が暮らす国、トルコ。

街を歩いていると、親が子供に、“Yavas,Yavas”（ゆっくり、ゆっくり）と諭しているのに出会うことがある。日本と対照的だなと思わず笑ってしまう。このような大らかな気質は住宅建設の面でも表れていて、仲間を集めて建設されるコーポラティブ方式の集合住宅も資金の集まり具合次第で工事を中断して建設されることも多い。しかし、一方で、人口が急激に増加しているために、地盤の悪い海岸沿いの低地の都市化が進み、耐震性の低い集合住宅が多く建設されてきた。8 月に 10 年を迎えたトルコマルマラ地震（全壊約 9 万戸、死者約 1.8 万人）について、被災地の復興の様子を振り返ってみたい。

トルコ政府は、全壊した持家層に対して財産保障的な観点から、郊外の丘陵部に約 4 万戸の低層集合住宅を 3 年程度で建設して安価に分譲し、一方で市街地の建物の階数を制限した。復興を機に郊外開発をすすめ、市街地では安全なまちづくりを進めようと考えたからだ。しかし、これからが一筋縄ではいかないトルコ流。これらの郊外住宅は居住義務がないため、入居者の半数は所有者から個人的に賃借契約している元団地周辺居住の子育て世代であり、長い時間をかけて多様な年齢層が住むコミュニティを形成してきた。神戸が抱える復興住宅の高齢者問題は少ないものの、複雑な思いである。さらにこれらの復興住宅団地を基礎に周辺も開発が広まり、10 年前に比べて新たな都市づくりの舞台は海沿いの被災地から丘陵部に移っている。

加えて、復興事業で支援の対象外となった賃貸層の低所得世帯のための住宅取得プロジェクトが、10 年にわたる市民団体の粘り強い活動の結果として進行中である。対象となる世帯は地震で借りていた住宅を失い、地域外に転居したり、安全性には不安が残る半壊住宅を賃借していることが多い。震災後に活動した市民団体の活動が終息していく中でこういった団体による住宅取得プログラムや雇用創出のための試みが、今後も展開していってほしいと願っている。

▲被災地郊外にある新興住宅地（完成直後）。現在では団地周辺に開発が進んでいる。

関西学院大学災害復興制度研究所5年フォーラム　日程：2010年1月9日（土）～11日（月・祝）

テーマ

阪神・淡路大震災がこの国に遺したもの

～人間復興の旗は立てられたのか

関連死なども含め公式死亡者 6434 人を超える犠牲者を出した阪神・淡路大震災は、悲しい言葉をたくさん生み落としました。孤独死、二重ローン、震災障害者、県外避難、関連死……。一方で、命、絆、思いやり、団らん。行き過ぎた経済至上主義が片隅に追いやっていた人間社会の大切さも改めて私たちに思い出させてくれました。「人間復興」を旗印に関西学院大学災害復興制度研究所が産声をあげて 5 年。災害多発時代を前に、格差と新たな貧困にあえぐ今、私たちがめざすべき社会のありようをみなさまとともに探ります。

1/9 Saturday

神戸国際会館 9 階　大会場　10:00 ～ 16:30

◆開会挨拶　ルース・M・グルーベル（関西学院 院長）

◆災害復興制度研究所の5年　山中 茂樹（災害復興制度研究所 主任研究員）

◆特別講演　髙村 薫（作家）

◆震災 15 年の総括　室﨑 益輝（災害復興制度研究所 所長）

◆震災復興コンサート　飯田 美奈子（オペラ歌手）

【午後の部】13:00 ～

◆インタビュー
長島 忠美（衆議院議員・災害ボランティア議員連盟 会長）
市村 浩一郎（衆議院議員・災害ボランティア議員連盟 副会長）
《聞き手》山中 茂樹（災害復興制度研究所 主任研究員）

◆パネルディスカッション

《パネリスト》50 音順
魚住 由紀（MBS ラジオ「ネットワーク 1・17」パーソナリティー）
貝原 俊民（財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構理事長・元兵庫県知事）
木村 拓郎（日本災害復興学会 復興支援委員会委員長）
外岡 秀俊（朝日新聞社編集委員〈香港駐在〉）

《コーディネーター》
室﨑 益輝（災害復興制度研究所 所長）

1/10 Sunday

関西学院会館　光の間　14:00 ～ 17:30

◆被災地交流集会
宮城・栗駒、新潟、能登、鳥取・日野、三宅島、神戸など被災地からゲストを迎える。

11:30 ～ 13:00　日本災害復興学会　総会（関西学院大学西宮上ケ原キャンパス　F 号館 102 号教室）

1/11 Monday

関西学院大学西宮上ケ原キャンパス　B号館101～104号教室　10:00 ～ 16:00

◆研究報告・分科会

■応募方法■

参加ご希望の方は住所・氏名・連絡先・傍聴希望日を明記の上、下記宛に郵便、FAX または研究所公式 HP の「お問い合わせ」ページにてお申し込みください。（入場無料）

〒662－8501
兵庫県西宮市上ケ原一番町1－155
関西学院大学災害復興制度研究所
URL：http://www.fukkou.net/　　FAX：0798-54-6997

※ 会場の都合上、9 日は定員 200 名、10 日は定員 100 名になり次第、締め切らせていただきます。なお、お申し込み時点で、既に受付が終了していた場合は、その旨折り返しご連絡させていただきます。参加証等は発行いたしませんので当日は直接会場までお越しください。

■主催：関西学院大学災害復興制度研究所　■共催：日本災害復興学会（10～11日）　■後援：朝日新聞社（9日）

事務局だより

2010 年度から 2 期に

災害復興制度研究所は 2010 年 1 月、創設 5 年を迎えます。阪神・淡路大震災 10 年にあたる 2005 年 1 月 17 日の発足ですが、事実上の旗揚げは 2 月 12 日に開催した「被災地の協働で復興制度を考える――第 1 回被災地交流集会 at KG」です（写真）。なぜ、震災 10 年からの出発だったのか。被災地 KOBE には「被災者責任」という言葉があります。被災者は被災の体験・被災の思想を次世代に、全国に、世界に伝える責任がある。震災 2 年目に西宮の NGO が提唱したスローガンです。私どもの研究所も、この被災地の責任を果たすべく旗を立てたのです。しかし、研究所だけで時代を動かすことはできません。全国被災地交流集会は、まさに「インフラ復興」から「人間復興」へ、思想の舵を切る草の根のエンジンとなりました。被災の各地から復興リーダーや研究者、ボランティア、自治体職員、ジャーナリストらが集い、被災の体験を交流し、被災地で生まれた知恵を、ストックにすべく意見の交換を続けてまいりました。また、2008 年には日本災害復興学会を立ち上げました。全国被災地交流集会に集まる人たちを中心に学者や政府官僚、防災コンサルタントの人たちも名前を連ねています。学会は、救急・救命期から復旧・復興期まで、さまざまなフェーズにおいて、基礎研究だけでなく、臨床分野まで手がけるという今までにない大胆な取り組みを始めたのです。

研究所は 5 年を期限としたプロジェクト型の組織としてスタートしました。5 年たてば店じまいの可能性もあったのです。それだけに私どもにとって、「想いのたいまつ」を引き継いでくれる組織づくりが急務だったのです。もっとも、研究所が立ち上げたネットワークはまた、研究所を支える人の輪でもありました。外部評価、そして学内の議決機関の議を経て、2010 年度から 2014 年度までの 5 年間、研究所は存続することとなりました。2 期計画において、私たちはいよいよ世界に目を向けなければいけないと考えています。中国には対口支援という仕組みがあります。「対口」。この言葉を聞くたび、私は親鳥がひな鳥にえさを口移しで与える図を連想します。まさに、これからは国際的な被災地間の対口支援を実現させていかなければなりません。そうです。世界の被災地交流集会です。研究所がそのための礎となることができれば。そんな夢をみなさんと共に描いていきたいと考えています。

（災害復興制度研究所主任研究員　山中　茂樹）

★関西学院大学災害復興制度研究所人事（09 年 10 月 31 日付）

▽研究所職員　　林　麻衣子（退職）

日本災害復興学会　会員募集中 !!

ご入会ご希望の方は入会申込書に所定の事項をご記入のうえ、下記の学会事務局まで郵送にてお申し込みください。入会申込書は、日本災害復興学会のホームページ（http://www.f-gakkai.net/）よりダウンロードしていただくか、下記までご連絡いただき、お取り寄せください。
また、後日事務局よりお送りする専用振り込み用紙にて必要金額をご入金ください。

（1）申込書送付先
〒662−8501　兵庫県西宮市上ケ原一番町1−155
関西学院大学災害復興制度研究所内
日本災害復興学会事務局
TEL：0798−54−6996

（2）入　会　金　　3,000円

（3）学　会　費（年額）
1）正 会 員　7,000円　　3）購読会員　6,000円
2）学生会員　3,000円　　4）賛助会員　一口：50,000円

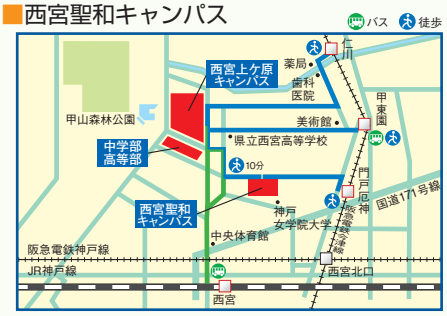
編集後記

人事のお知らせにもありましたように、このたび経理業務を担当されていた林さんがご退職されることになりました。ほぼ発足当初から勤務され、「生き字引」とも言える存在を失うことになり、今、研究所は大パニックです。私にとっては良い先輩であり、そして妹のような存在でもありました。いつも周りを明るく和ませてくれる彼女に私は随分助けられました。さよならするのは辛いけど、今後の益々のご活躍を心より祈っています。

さて、来年の 1 月は研究所発足 5 年ということで、いつもより 1 日長い 3 日間のフォーラムを開催します。これまで、みなさまにご協力いただいた研究所活動の集大成となるよう準備を進めてまいります。このフォーラムで 5 年間の幕を閉じ、そしてまた新しいスタートができればと思います。多くのみなさまにご参加いただき、貴重なご意見をいただければ幸いです。お会いできるのを楽しみにお待ちしております。　《中阪　薫》

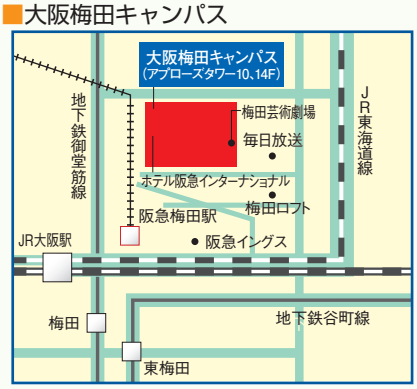
※ 研究所の年末年始の休日は、12 月 25 日（金）から 1 月 5 日（火）までです。

■西宮上ケ原キャンパス
■西宮聖和キャンパス



■神戸三田キャンパス

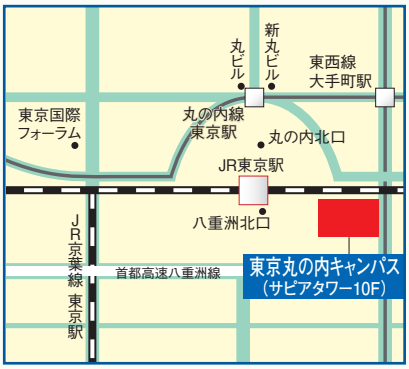
■大阪梅田キャンパス



阪急梅田駅茶屋町口から北へ徒歩5分

〒 530-0013 大阪市北区茶屋町 19-19
アプローズタワー 14 階
TEL：06-6485-5611

■関西学院東京丸の内キャンパス



JR東京駅八重洲北口から徒歩1分

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12
サピアタワー 10 階
TEL：03-5222-5678

関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY
災害復興制度研究所

〒662-8501　兵庫県西宮市上ケ原一番町1番155号
TEL:0798-54-6996　FAX:0798-54-6997
http://www.kwansei.ac.jp
URL:http://fukkou.net/　E-mail:kgu_fukko2005@fukkou.net

2009年11月発行